

東北応援ツアーに参加して

1965年 法学部卒 柳瀬 高啓

応援ツアーは二度目である。最初は震災一年後、個人的に同じ岩手県を訪れた。釜石、大槌町、陸前高田の街は津波で崩壊し、ガレキが街のいたる所で積み上げられ、大きな船がビルの屋上にそのまま乗っていた。あの有名になった一本松も弱々しく淋しげに立っていた。

二度目の今回は、ガレキは撤去され街は片づいていたものの、家屋の土台のみ残り三年経っても街は復興の折にもついでないように思われた。

住んでいた人々はどこへ行ってしまったのか。過酷な避難生活を今も強いられているのだろう。現地で佇みながら、あのテレビで見たすさまじい災害が今はリアリティを失っていることに私は戸惑っていた。

もうすぐ五年となる。正直いって被災地の人々を除けば日本人の多くは災害のことを忘れて生活しているのではないか。申し訳なく悲しいことではあるが歳月は残酷である。

あの震災で私が学んだことは自然や地球に対する見方である。

今までは深く考えなかったが「地球は人間のためにあるのではなく、地球そして自然は人間におかまいなく、自分達の摂理でそこに在る」ということである。

人間が頭の中で「想定外」「未曾有の災害」などと大騒ぎしているが、所詮人間の浅知恵、傲慢であり、地球（自然）は自らの摂理に沿って淡々と営んでいるに過ぎないのだ。

とくに日本列島のような様々な自然件が重なった上に住むものにとって東北大震災は「何が起きてもおかしくない。」という覚悟をもって日々生きることを強く教えてくれたように思う。